

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

香り立つハイブリッドなマレー半島の食文化

櫻田涼子 (育英短期大学准教授)

2015 年 8 月に独立 50 周年を迎えたシンガポールでは、ここ数年、庶民の食文化をナショナル・ヘリテージへと押し上げようとする動きが盛んに見られる。屋台で楽しめる海南鶏飯やサテなどの食事類はもちろんのこと、マレー半島の喫茶文化コピティアムが人びとのノスタルジックな感傷を刺激しつつ、国民的文化としての価値を見いだされ、脚光を浴びている。

コピティアム (kopitiam) とは、マレー語で「コーヒー」を意味する kopi と福建語で「店」を意味する tiam からなる語で、コーヒーや紅茶などの嗜好飲料と軽食を提供する喫茶店で、主に中華系によって経営されるのが一般的だ。砂糖とマーガリンを加えて焙煎した濃厚な味わいのコーヒーや、ココナッツミルクとパンダンの香り豊かなカヤジャムを塗ったトーストなどが楽しめ、マレー半島の街角に遍在するフードスケープである。



国立シンガポール博物館に展示されるコピティアムのカップ (筆者撮影)

そんなコピティアムは、かつては華人男性が政治談義に花を咲かせる「男たちの空間」であった。コピティアムは 19 世紀後半からマレー半島に大量に流入した中国南部からの移民の中でも、特に後発移民の海南島出身者によって 1930 年代にはシンガポールで始められ、労働移民として単身渡来した中国人男性が寝間着のまま朝食を食べる場所だった。テレビが一般家庭に普及するまで、コピティアムは人びとが集い、情報交換する重要な社会空間として機能したという。実際、筆者のフィールドであるジョホール州北部の田舎町にある住宅団地内のコピティアムは、現在でも男性が中心となって利用する社会空間である。例えば、儀礼に参加するなじみの男性客たちがツケ払いで利用する機会もあるため、女性が一人でふらりと利用するにはどうも落ち着かない独特の空気が流れているような気がするのだ。



イポーのオールドタウン・ホワイトコーヒーの外観 (筆者撮影)

その一方で、今日ではコピティアムの懐かしさを喚起する雰囲気商機を見だしチェーン展開を図る「オールドタウン・ホワイトコーヒー (Oldtown White

Coffee)」や「クラン駅コピティアム (Kluang Station Kopitiam)」などの勢いが顕著である。「オールドタウン」はマレーシア国内に 200 以上の店舗を擁し、インドネシアやオーストラリアなど海外展開にも力を入れている。これらのチェーン店コピティアムの特徴は、閉ざされた「華人男性の社会空間」からマレー人も飲食可能なハラール・フードを提供する国民的飲食空間へと変貌を遂げている点に尽きるだろう。つまりチェーン店コピティアムは、民族の垣根を超えての共食を可能とする使い勝手の良いコスモポリタンの飲食空間となっているのだ。都市部のオフィス街のランチタイムにこれらのコピティアムを覗いてみると、マレー人、華人、インド系の同僚とおぼしき人びとがテーブルを囲み談笑しながらランチをとる様子を目にすることが出来るだろう。このように見てくると、多様な文化、多様な人びとを架橋するコピティアムがナショナル・ヘリテージとして再発見される近年の様子は、マレー半島のハイブリッドな文化生成の過程と重なり、なるほど納得がいくのである。

< 筆者紹介 >

1975 年東京生まれ。筑波大学大学院人文社会科学研究所歴史・人類学専攻修了。博士 (文学)。専門は文化人類学で、マレーシア華人の日常生活に関する調査研究を行っている。共著論集 Rethinking Representations of Asian Women: Changes, Continuity, and Everyday Life. (Palgrave Macmillan, 2015) を上梓予定。